

平成 21 年度

**埋蔵文化財課年報〈14〉**

財団法人 松江市教育文化振興事業団

# 出雲国分寺跡

1. 所在地 松江市竹矢町442-1・453-11・454-6
2. 調査原因 道路拡幅工事
3. 調査期間 平成21年7月1日～平成21年10月16日
4. 調査面積 706㎡
5. 調査の概要

国分寺南門のほぼ正面から北東方向に向かって、伽藍域をも含んだ細長い調査区を掘り下げた。

遺構としては瓦敷遺構2箇所、完形の丸瓦を多量に含む性格不明の遺構1箇所、粘土採掘坑8箇所、溝跡2箇所を検出した。いずれも重要な遺構であるが、特に溝1箇所は伽藍域の南限、他の1箇所は伽藍域の東限を区画する溝（伽藍中軸線から1町強の場所）であることが判明した。

伽藍域の南限を区画する溝を0.5×0.5m掘り下げたところ、溝の底部から11世紀の土師質土器の高台付碗が多数出土した。この事実は、11世紀には国分寺正面の溝に器物が落ちていても違和感が無い状況にあったことを示すものであり、それ以降溝は掃除されることもなくなり埋もれていったことを示している。伽藍廃絶に関連する遺構として重要な発見であった。

(江川幸子)



調査地位置図



伽藍域南限の溝平面プラン



# 石 流 遺 跡

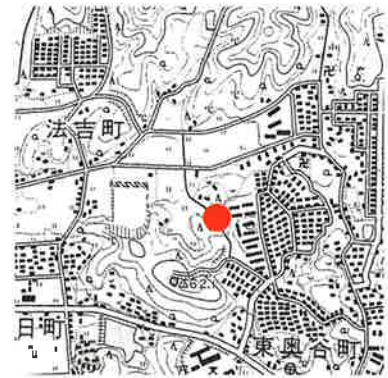
1. 所在地 松江市法吉町371-6・372-3・898-2
2. 調査原因 上水道管布設工事
3. 調査期間 平成21年4月10日～平成21年6月24日
4. 調査面積 470㎡
5. 調査の概要

調査区中央よりやや東側の微高地で、7世紀初頭の須恵器を多数伴う加工段状の遺構を検出して精査をおこなった。中央に畦を残して精査をおこなっていたら、床面は西側で高くなり、南側では高さ約5cmの壁が立ちはだかった。理解できない遺構である。

よくよく観察すると、はるか西側で加工段状遺構の基盤土の下に遺物包含層が潜り込んでいる状況が観察され、遺物包含層上の土を除去すると、フラット面が現われて多数のピットが検出された。江戸時代初頭の国産天目茶碗が出土したのでその頃に大きな地すべりがおこったことがわかった。字名のとおりに、まさに石が流れる場所である。

そのほかの遺構としては、加工段遺構2、掘立柱建物1棟、柱列2ヶ所のほか多数の溝、ピットを検出した。その時期は古墳時代末期である。調査区西端部では弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を伴う土坑を検出した。

(江川幸子)



調査地位置図



地すべり上の遺構と地すべりの痕跡



## 来美南遺跡

1. 所在地 松江市山代町字来美698-1
2. 調査原因 住宅新築工事
3. 調査期間 平成21年4月13日～平成21年5月20日
4. 調査面積 156㎡
5. 調査の概要

調査は限定された範囲で、削平や造成による攪乱もあり、自然流路以外に明確な遺構は検出できなかったが、3層の遺物包含層が確認できた。興味深いのは、山代郷北新造院跡（来美廃寺）と同類型の瓦が多数出土し、来美廃寺創建時（7世紀末～8世紀初）の瓦と考えられる類型の瓦が出土した。平瓦については来美廃寺本体の出土傾向と比較して分類不能な瓦が多く、本遺跡を十分特徴付けている。

出土遺物の時期については3つに分けられる。

- ① 7世紀後半、来美廃寺の創建期（7世紀末～8世紀初）直前の時期。
- ② 7世紀末～9世紀後葉、量的には8世紀中葉～9世紀後葉のものが大半を占める。
- ③ 11世紀中葉～12世紀初頭、土師質土器の皿や脚付皿形土器、中国製の白磁碗の時期。

これらの遺物は北側丘陵が大きく削平され、本来の場所も削平を受けている可能性が高く、北側の来美廃寺本体、第4基壇がある平坦地、もしくはさらに下段、寺院中央を南北に通る参道西側からの流れ込みと想定したい。

今回の調査では来美廃寺で出土しているような仏具関係の遺物が少なく、鴟尾などの道具瓦が出土していないことから、本遺跡は寺院本体の施設ではなく、僧房や政所などの周辺施設であった可能性も考えられる。全容は不明といわざるをえないが、今回の調査で、今後の来美廃寺の周辺施設や周囲の景観を検証、復元するための、貴重な資料を得られた。

（石川 崇）



調査地位置図



自然流路検出状況（上：右下の黒い部分）  
軒丸瓦（右上）、平瓦・須恵器（右下）出土状況

## 史跡出雲玉作跡宮ノ上地区

1. 所在地 松江市玉湯町
2. 調査原因 史跡整備
3. 調査期間 平成21年11月5日～平成22年1月20日
4. 調査面積 215㎡
5. 調査の概要

平成21年度の調査は、前回（平成18年）の調査で確認できなかった御茶屋建物に付随する庭園部分の調査を主たる目的として発掘調査を実施した。調査地内は昭和初期まで居住区域だったうえに、遺構面や地山面の覆土もほとんどない状態だったため、遺物が混同していて判別が困難であったが、植栽の有無や苑池の規模及びそれに付随する施設等を礎石や配石の状況で確認することができた。



調査地位置図

前回の調査では、本地が近世初頭に大規模な土木工事によって田中川の流れを変えて敷地を造成したことが判明したが、今回の調査では、その堆積状況から、造成の状況や苑池に水を引き込むための流路（導水路）を検出した。

また、御茶屋に付随する庭園の苑池東側の後背部分の造作の状況と手水鉢の位置が動いていたかどうかの状況確認では、原位置のままではないかと思われること、苑池後背に当たる東側の築山部分には植栽痕は認められなかったこと、玉作湯神社側の崖面には極めて明瞭な斫り痕が認められ、苑池の境界が明確に確認できたのである。

今回調査を行った宮ノ上地区の田中川に面する北半は、全体的に、江戸時代に玉作湯神社側の崖面を削って平坦地を造成して苑池を作って水を引き、更に借景としても活用するという極めて合理的な用地の造成がされたものと推察され、今後の整備計画に有意義な成果となった。

(中尾秀信)





# 池平山城跡

1. 所在地 松江市鹿島町佐陀本郷  
2903-2、11・13、2905-1・3、2907-3
2. 調査原因 松江鹿島美保関線佐陀本郷工区  
改築（改良）工事
3. 調査期間 平成21年5月15日～7月24日
4. 調査面積 526㎡
5. 調査の概要

池平山城跡は、文献資料によれば応永6（1399）年、佐太神社の神主であった第十八代朝山昌時（安芸守）によって築造されたと伝えられる中世の山城である。島根半島の北山系から延びる丘陵に位置し、主郭は長さ約65m、幅約20mの細長い平坦面で櫓台が築かれている。他に縄張り調査から、腰曲輪や堀切、郭が確認されている。

今回の発掘調査では西2、3郭の一画と南西側尾根の調査をおこなった。その結果、西2、3郭の一画からは郭4箇所、通路状遺構2条、土坑2箇所を検出した。郭は削り出しや、盛土によって造られ、周囲の斜面は急峻であった。南西側尾根からは、新たに郭と柵列が確認され、南西1郭とした。

池平山城跡から東側には日本海を望むことができる。池平山城は文献からその役割を知ることは難しいが、立地からすると室町時代から戦国時代において、日本海側の海上交通を監視するには最良の場所であったと考えられる。中世の山城の調査例は少なく、数少ない城館調査の一資料となった。

（廣濱貴子）



調査地位置図



池平山城縄張り図





## 上講武清水遺跡

1. 所在地 松江市鹿島町上講武840-2
2. 調査原因 市道大石清水線道路新設工事
3. 調査期間 平成21年10月27日～平成22年1月19日
4. 調査面積 158㎡
5. 調査の概要

本調査区は東から西に向かって下る標高58.0～61.0mの斜面に位置する。地表下約0.8mに遺構面を確認し、掘立柱建物跡1棟、土坑4個、溝状遺構2条、ピット群を検出した。掘立柱建物跡は調査区が限られていたため全体をすることは出来なかったが、桁行2間梁間1間以上の建物跡と考えられた。床面直上から内側にかえりのある蓋や回転糸切り痕の底部が出土し、7世紀末から8世紀初め頃の建物跡と考えられた。土坑は形や大きさも様々で、性格は不明である。

調査区内からは狭い調査範囲の割には多く、6世紀末から9世紀代の遺物、須恵器の蓋や坏、土師器の甕片、甌、土製支脚、砥石などが出土した。なかでも7世紀末から8世紀初め頃のものが多く、9世紀代の焼成の甘い坏も出土している。

建物跡は1棟であったがピットは多く、また、出土遺物も多いことから、調査区および周辺には多くの建物が建っていたと考えられた。本調査区周辺では、横穴墓や古墳、山城等の遺跡が確認されているが集落遺跡はなく、当地域周辺の人々の生活を知るうえでひとつの資料となった。

(廣濱貴子)



調査地位置図



完掘状況 (西から)



## 佐太前遺跡（工事立会）

1. 所在地 松江市鹿島町字名分
2. 調査原因 広岡川河川改修工事
3. 調査期間 平成21年10月15日～平成22年3月9日
4. 調査面積 961㎡
5. 調査の概要

周知の遺跡である佐太前遺跡は、平成19年度から21年度にかけ調査が行われ、縄文から中近世に到る遺構、遺物を多数検出した。今回の調査は、佐太神社前の、現道及び現河川下側部分の一部について、工事施行時に、立会調査を行った。

調査は、付近に建物などがあり、危険を伴う箇所については重機掘削土中より遺物を取り上げることとした。調査の結果、遺構面2面を検出した。

第1遺構面では、佐太神社に残存している本殿配置を示す指図版に沿う建物跡と考えられる柱穴を検出した。『出雲国風土記』によると、出雲国二宮である佐太神社は、古代末から中世にかけて勢力を誇っていたことが知られている。

第2遺構面では、弥生時代後期から古墳時代初めにかけての遺物を多量に含む土坑、柱穴、溝状遺構などを検出した。遺物は、甕、器台、高坏などが出土した。

また、瓦質土器片1点のみの出土ではあったが、朝鮮半島系の遺物が出土した。周辺の遺跡でも渡来系の遺物が出土しており、海上交通が重要な役割を果たしていたと考えられる。

このように多くの遺構、遺物により、佐太前遺跡を中心とする人々の生活の一部を確認することができ、貴重な資料となった。

(清水初美)



調査地位置図





## 松江城下町遺跡（母衣町40番地外）

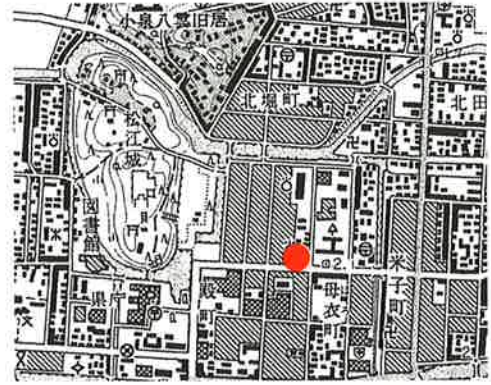
1. 所在地 松江市母衣町
2. 調査原因 都市計画県道城北・北公園線拡幅予定
3. 調査期間 平成21年6月1日～平成21年6月26日
4. 調査面積 34.5㎡
5. 調査の概要

今回の調査地は行政評価事務所があり、それ以前には松江憲兵分隊が置かれたところである。本調査で確認した生活面は、表土直下から3面あった。

第1遺構面は幕末から明治期にかけての遺構を主体とし、現代の攪乱層も多くみられた。検出した遺構は、松江憲兵分隊建物基礎・土坑状遺構・柱・頭骨埋納坑などであった。礎石の可能性をもつ石もいくつか検出されたが、整然と並ぶものではなく建物跡とするに至らなかった。頭骨埋納坑は憲兵隊建物基礎（石敷き）の下で検出したものであり、幕末か明治の早い時期に埋納したと考えられる。

第2遺構面は17世紀第2四半期頃以降のもので、換言すると松平入府前後以降のものと思われる。検出された遺構は土坑状遺構である。

第3遺構面は17世紀第1四半期頃のもので、松江開府当時の様子を示している。検出された遺構は土坑状遺構、壁状遺構、溝状遺構である。



調査地位置図

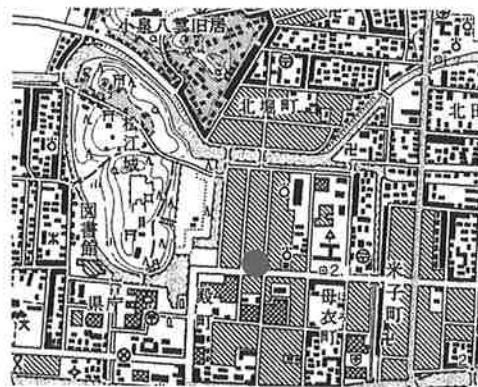
(石川 崇)



## 松江城下町遺跡（殿町344番地外）

1. 所在地 松江市殿町344-1・2、343-2
2. 調査原因 都市計画県道城北・北公園線拡幅予定
3. 調査期間 平成22年2月16日～平成22年3月23日
4. 調査面積 77㎡
5. 調査の概要

調査区は江戸の絵図に侍町と記されており、堀尾期が下方又之丞、松平期が柳多波氏の屋敷地に比定される場所である。土層観察をおこなった結果、遺構面が6面あると考えられたが、上面から4面までの遺構面について調査をおこなった。



調査地位置図

### 第1遺構面

表土直下で検出した遺構面で標高1.85～1.9mを測る。調査区北側から礎石と来待石の石列が東西方向に併行して検出された。礎石は長径0.5～0.6m、厚さ0.5mの大きさのもので、約1m間隔で並んでいた。住民の方の話からすると土蔵があった場所でその礎石と思われた。来待石の石列には、約1mごとに大きめの石があり、また柄穴が開いたものもあり、何らかの建物の土台と考えられた。明治6年の町割り図と石列の方向が同じであり、また幕末から近代以降の陶磁器が出土していることから、第1遺構面は近代以降の遺構面と考えられた。

### 第2遺構面

第2遺構面は、標高1.6～1.7mで検出した遺構面である。溝状遺構や土坑、ピットを検出した。溝状遺構や土坑は浅く、ピットのなかには根石だけが残っているものもみられた。ピットから建物を復元することはできなかった。遺構内からは18世紀代の陶磁器、瓦、鉄製品などが出土し、この遺構面は18世紀代と考えられた。

### 第3遺構面

標高約1.4mで検出した遺構面である。多数のピットや土坑を検出した。ピットのなかには樹皮のついた杭があり、1.2mの間隔で並んでいた。住居などの建物に伴うものとは考えにくく、可能性として塀とか簡易的な建物に伴う杭ではないかと思われた。また、小さなピットが一行に並んでいるところもあり、柵の可能性が考えられた。他に根の残る植栽痕もみられ、この遺構面は庭の可能性が高いと推測された。遺物は陶磁器片が数点あるのみで、この遺構面の時期を明確にすることはできなかった。

### 第4遺構面

標高1.2～1.3mで検出した遺構面である。この面からは5cm前後の礫が敷かれた礫敷遺構を検出し、部分的な沈み止めと考えられた。他に明確な遺構がみられなかったため、少し掘り下げて調査をおこなった。その結果、土坑3個、溝状遺構3条、ピット、ゴミ土坑を検出した。ゴミ土坑は現状で長さ4.5m、幅1.6m、深さ0.25cmを測る。ゴミ土坑の南壁、西壁側からは太さ1cm程の竹を縦と横、格子状に組んで作られたもの（竹製格子状土留め）が出土し、ゴミ土坑の壁際の土が内側に崩れないための土留めと推測された。

このゴミ土坑からは、漆碗、羽子板などの木製品、京都系と在地系の土師質皿、胎土目の唐津皿、中国製花碗や皿が出土し、17世紀初め頃のものと思われた。

溝状遺構は3条検出しているが、そのなかの1条は横木を伴う溝であった。長辺を東西方向にとり、東側に向かってやや傾斜していた。ゴミ土坑と併行しているが土層の切合関係からゴミ土坑より古いと考えられた。遺構の性格は不明である。



## まとめ

今回の調査において、4面の遺構面を検出し、そのうちの3面については時期を特定することができた。狭い範囲であったが、遺構面からは様々な遺構が検出され、時期ごとの調査地の様相を垣間見ることができた。また、ゴミ土坑から出土した遺物は同時期のもので、ここに住んでいた人々の暮らしを知るよい資料となった。

(廣濱貴子)



第1遺構面（南東から）



第2遺構面（東から）



第3遺構面（東から）



第4遺構面（東から）



第4遺構面 竹製格子状土留め（北東から）



竹製格子状土留め

## 松江城下町遺跡（立会調査：殿町～南田町）

1. 所在地 松江市殿町、母衣町、米子町、南田町
2. 調査原因 都市計画県道城北・北公園線拡幅予定
3. 調査期間 平成22年2月16日～平成22年3月23日
4. 調査面積 77㎡
5. 調査の概要

県道城山北公園線（殿町から南田町）の電線管路工仕にか  
かる工事立会調査を計39か所（3か所の確認を含む）実施し  
た。

極暗褐色土（通称チョコ層）を自然堆積土とし、この層以  
下では遺構・遺物とも全く検出されていない。この層を検出  
した面の最高所の標高は0.8m～0.4mであり、松江城に最も近い位置では、現物産館前が最も高い位置で  
検出されるが、母衣町40番地外調査区では、0.4mの高さで検出していることから、他は比較的平坦な面  
が形成されていたと思われる。

ただし、素掘りの水路跡を検出した地点もある。いずれも標高0.4～0.5mから掘りこまれたもので、北  
側の肩部分から水路中央に向けての範囲で検出した。確認できた深さは0.6m前後を測る。南側の肩を検  
出していないので正確な規模は分からないが、3m以上のものを想定している。

この水路跡は、東西にほぼ一直線状に並んで検出されているので一体のものとしてとらえられる。推測  
の域を脱しないが、石組水路が築かれている範囲と上下に重複すると考えている。水路は、現存する石組  
水路の南側石組の下から南に掘られているので、道路幅は後の時代より広がったと推定できるが、北側の  
素掘り水路を検出していないので断定はできない。素掘り水路肩部の東西方向はN-94°-E（南北の方  
向は国土座標の軸線）を測る。

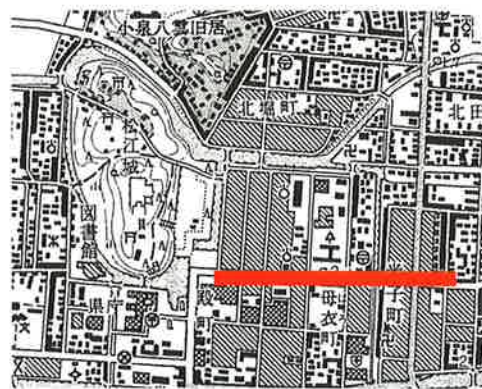
水路内から遺物出土はなかったが、水路埋め土の直上から志野焼皿が出土している場所もあるので、17  
世紀初頭に掘り込まれ比較的近い時期に埋められた可能性があると考えられる。水路の性格については、  
東流するものか西流するものか把握することができなかったが、城下町形成時の排水のためのものであ  
った可能性がある。

現道路面の南側では、ほぼ一直線状に並ぶ石組を検出している。石組の正面部分で測ると、東西方向は  
N-93°-E（南北方向は国土座標の軸線）となる。標高0.5～0.6mのあたりから0.8～1.2mの高さを積  
み上げている。位置的には素掘り水路肩の直上にあたるが、埋土との間に何層か介在している。18世紀半  
ばの遺物が出土しているので、この年代を石組の築かれた年代と考えている。

北側石組は、石の組み方・石材の相違・上端と下端のレベルの違いなどから、南側石組より後出のもの  
と考えている。しかし、その時期差については不明である。南側石組は南側の土地造成後間もなく造成地  
の崩壊防止と水路を兼ねて築かれたが、後に道路の整備に伴って北側石組が築かれ石組水路となったもの  
と考えている。現県道の北側で石組水路を検出していないので、当時の道路幅を示すことができない。

素掘り水路と石組水路遺構の項で述べたように、東西にのびる水路から水路に沿った道路の存在が推定  
できる。江戸時代各期の絵図と大差ないように思われる。立会を行った部分は、屋敷地と道路の境にあ  
たる部分を中心であるが、ほとんどが工事によって攪乱されていて遺構を検出するにいたらなかった。

（中尾秀信）



調査地位置図





北側石組（西側から）



水路遺構完掘状況（西側から）



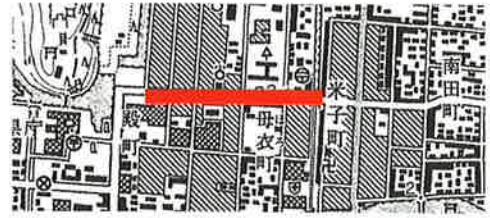
北側石組直下の垂直トレンチ



南側石組裏込石（南西から）

# 松江城下町遺跡（立会調査：殿町～母衣町）

1. 所在地 松江市殿町～母衣町
2. 調査原因 松江市城山北公園線都市計画街路事業に伴う
3. 調査期間 平成21年1月1日～3月31日
4. 調査面積 総計470㎡（17箇所）：3～64㎡
5. 調査の概要



調査地位位置図

## 1) 調査区設定

調査は、殿・母衣町を横断する城山北公園線拡幅予定歩道地内で、電線地中化に伴う電線共同溝及び下水道埋設工事に伴う立会調査である。殿町・島根ふるさと館前、母衣町・松江地方裁判所前城山北公園線南側を中心に調査が行われ、電線共同溝関係は11箇所、下水道関係は6箇所となった。

調査区記号については、「M=松江、J=城下町、R=立会調査、連番」として表記してある。なお番号は、松江市教育委員会文化財課が行う松江城下町試掘調査区の番号と連動している。

## 2) 歴史的環境

松江市の殿町・母衣町は、城下町の城郭内を表す「内山下<sup>うちさんげ</sup>」と呼ばれており、城山北公園線脇には、江戸時代の石組の側溝があるといわれている。現側溝の蓋をはずすと石組が一部見受けられるところもある。江戸中期の絵図面から、殿・母衣町の道路幅員は、概ね5間2尺（10.35m）、溝幅は2尺（60cm）とされている。

## 3) 調査の概要

調査区は、工事範囲に合わせて面積及び掘削深度が決まり、狭い範囲での点在調査になることから、特記すべき調査区の遺構を関連づけて報告するものである。

### 遺構

#### \*石組側溝

城山北公園線の南側には、道路に平行して一部に石組の側溝が走る。この石組側溝は、MJR191では北側を面にして積み上げられている南壁石組を、側溝北壁面部は消失を確認している。MJR196・197では溝両壁が検出され、大海崎石が多く使われている。場所により面加工の違いが見受けられ、これは屋敷地による相違とも考えられる。石組側溝の建造時期を決定づける物証は、現在のところ無い。

#### \*ゴミ穴

今回の調査では、底部の有機物堆積層を一部検出する程度で終わっており、掘り込み部の検出は極めて難しい。松江地方裁判所前城山北公園線の南側からの出土遺物は、概ねゴミ穴からの出土と考えられる。

#### \*素掘りの大溝

MJR196、197、206、207から自然堆積層と考えられる黒褐色粘質土（通称チョコ層）及び灰色シルト質層を大きく掘り込む「掘り方」検出している。素掘りの溝と考えられる。これは城山北公園線南側縁に東西に伸びている。

## 4) まとめ

工事に伴う立会という限定された調査ではあるが、石組側溝の遺存状態、ゴミ穴の確認を行うことが出来た。

素掘りの大溝に関しては、江戸初期に行われる造成の第1段階の作業と考えている。当初、碁盤の目の





MJR196 「西壁」画面右手が城山北公園線 東側から城山北公園線から南側への掘り込みを検出

ように縦横に掘り込まれているというイメージを持っていたが、今回の調査で、屋敷地角地はL字状になっていることが判明した。つまり道路に沿う形で大溝が掘り込まれているもので、道路部分には掘り込まれてはいないと推測できる。道路部はそのまま道路として使われていたのではと考えられる。

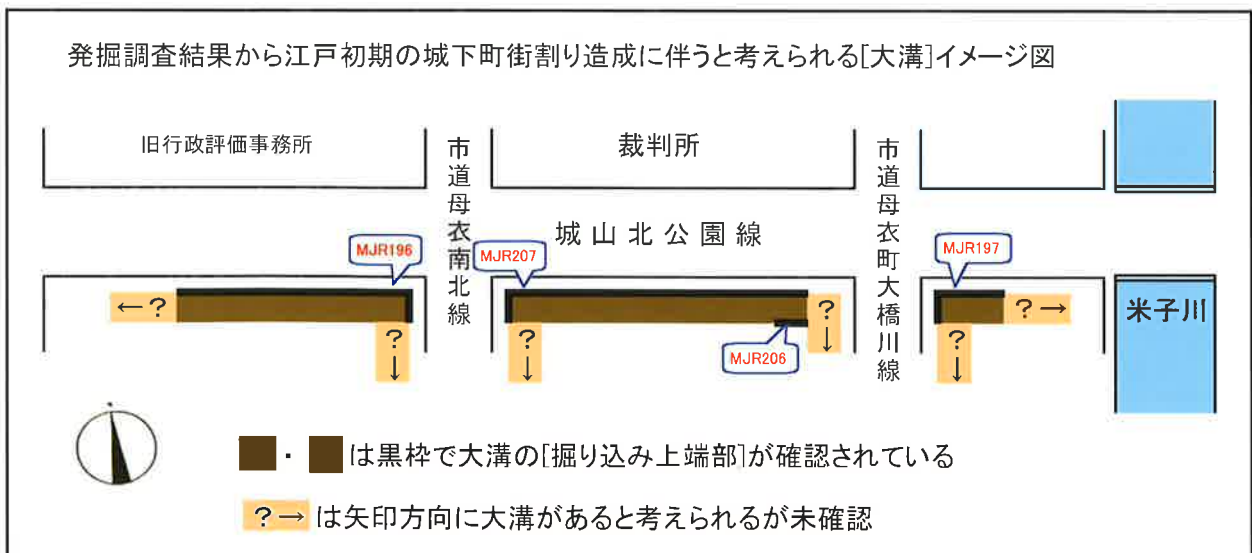
現在のところ、屋敷地から道路部への発掘調査は行われていないので、あくまで想定の域を出ない。今後、道路角地の屋敷地から道路に向かう横断工事が行われるならば、確認したいところである。

今後、本発掘調査結果を軸に、立会調査という「点調査」でさらに城下町遺跡の肉付けを行い、検証を進める必要がある。 (柚原恒平)

\*各立会調査地で検出した素掘り大溝に関するデータ一覧表

調査地	内容	大溝検出 [ 黒褐色有機物堆積状況から標高数値を示す(m) ]											
		東壁面			西壁面			南壁面			北壁面		
		上端	下端	下降方向	上端	下端	下降方向	上端	下端	下降方向	上端	下端	下降方向
MJR196	(城山北公園線と市道母衣南北線交差点の西南部角地)				0.35	-0.25	城山北公園線側から南へ	0.15	-0.5	市道母衣南北線側から西へ			
MJR207	(城山北公園線と市道母衣南北線交差点の東南部角地)										0.55	-0.16	市道母衣南北線側から東へ
MJR206	(カ頭宅東側の現歩道と駐車場の間2カ所)				0.92 0.75	不明	北側へ						
MJR197	(城山北公園線と市道母衣町大橋川線交差点の東南部角地)	0.3	-0.5	城山北公園線側から南へ				0.3	-0.5	市道母衣町大橋川線側から東へ			

\*上記のデータをもとに、大溝のイメージ図



## 松江城下町遺跡 城山北公園線立会調査一覧表及び立会箇所位置図

電線共同溝工事関係

調査日	遺跡名	調査区 M J R	調査箇所詳細	調査面積 ㎡	長軸×短軸 (m)	深さ (m)	陶磁器	木製品
10.01.07 ~12	殿町191番地13他	M J R 186	物産館前	12.71	東西0.9×南北12.7	1.20		
10.01.08 ~12	殿町191番地13他	M J R 187	物産館前	8.47	東西7.7×南北1.1	1.00		
10.02.04 ~05	殿町191番地13他	M J R 190	物産館前	18.20	東西18.0×南北1.1	1.10	○	
10.02.08 ~09・23	母衣町135-4他	M J R 191	テラー竹中前	10.29	東西4.9×南北2.1	1.40	○	○
10.02.10 ~12	母衣町80-3他	M J R 192	PAGスクエア前	42.84	東西23.8×南北1.8	1.20	○	
10.02.16	殿町191番地13他	M J R 193	物産館前	13.77	東西5.1×南北2.7	2.10		
10.02.22	殿町191番地13他	M J R 194	物産館前	3.64	東西2.6×南北1.4	1.40		
10.02.23 ~24	母衣町135-4他 ~134-12	M J R 195	テラー竹中他前	38.50	東西17.5×南北2.2	1.40		
10.02.23 ~27	母衣町35-4	M J R 196	鈴木邸前	34.30	東西7.22×南北4.75	3.00	○	
10.03.08 ~15	母衣町183-2他	M J R 197	戸谷邸北側歩道内	25.84	東西6.8×南北3.8	3.00	○	
10.03.03 ~04	母衣町135-12	M J R 198	藤田駐車場前	64.80	東西27.0×南北2.4	1.70	○	○

11箇所

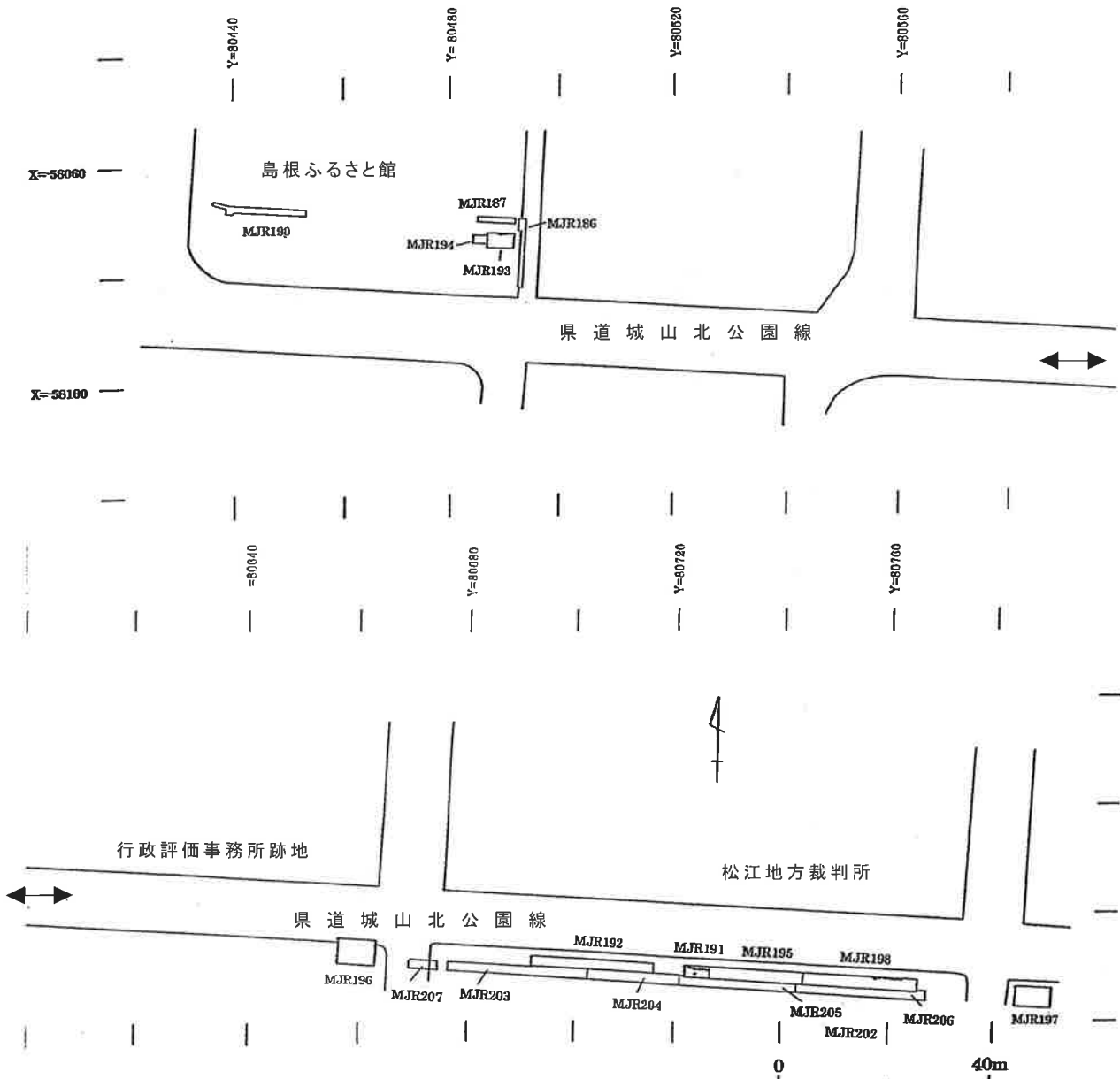
計 273.36

下水道工事関係

調査日	遺跡名	調査区 M J R	調査箇所詳細	調査面積 ㎡	長軸×短軸 (m)	深さ (m)	陶磁器	木製品
10.01.07 ~01.08	母衣町135-4他 ~134-12	M J R 202	PACビル裏側駐車場中央部 ~堤小堀秀隆宅北側歩道	44.89	東西37.41 ×南北(0.6×2条)	1.00	○	
10.01.12 ~01.14	母衣町80-3他	M J R 203	市道母衣南北線東側歩道緑石 (西面)を起点0mとして 東へ4.75m地点~28.54m地点間	38.06	東西23.79×南北1.6	2.00	○	○
10.01.21 ~01.22	母衣町80-3他	M J R 204	同上 28.54m地点~46.85m地点間	28.98	東西18.11×南北1.6	2.00	○	○
10.01.28 ~01.29	母衣町75-8 ~母衣町135-4他	M J R 205	同上 46.85m地点~67.55m地点間	33.44	東西20.9×南北1.6	2.00	○	○
10.02.04 ~02.05	母衣町134-12	M J R 206	同上 67.55m地点~92.71m地点間	40.28	東西25.16×南北1.6	2.00	○	○
10.02.15 ~02.16	母衣町80-3他 ~市道母衣南北線 (東側歩道)	M J R 207	同上 起点より東へ2.8m~ 起点より西へ3.45mの0.05m間	11.03	東西2.25×南北2.2 東西3.8×南北1.6	2.85 2.00		○

6箇所

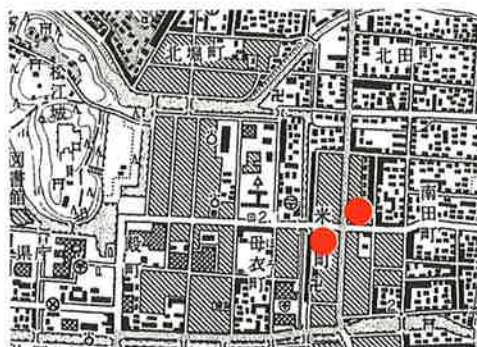
計 198.66





# 松江城下町遺跡（米子町47番地外・南田町52-7番地外）

1. 所在地 松江市米子町47番地外、南田町52-7外
2. 調査原因 松江市城山北公園線都市計画街路事業に伴う
3. 調査期間 平成21年2月23日～同年3月16日
4. 調査面積 ①米子町47番地外7.5㎡  
②南田町52-7外 [1区9㎡]  
③ 同 [2区30㎡]



調査地位置図

## 5. 調査の概要

### ①遺跡名 [米子町47番地外]



米子町47番地外近景 赤枠が調査範囲 東側から

### 1) 調査区設定

調査区は、米子町の城山北公園線南側の歩道内で、現・フルーツ店の前である。ここは江戸絵図面から町屋と武家屋敷の境地ということになっていることから当地を調査区とした。つい最近まで南北方向の側溝が通っていた場所で、この側溝を中心にして東西3×南北2.5mの方形区画とした。

### 2) 歴史的環境

米子町の町名の由来は、松江城築城の際に伯耆国米子から移住した職人が居住したことによるとされている。江戸絵図面から、江戸時代の米子町と現在の米子町の街割りがほぼ一致していることが伺え、今回の調査区は、西側には町屋、東側には武家屋敷がある「境地」と想定される場所である。南田町側の屋敷は500石以下の武家屋敷とされており、屋敷出入口は東側の南北道路（現：国道431号線）に面している。江戸中期の資料から、東西道路の幅員は、2間4尺（5.1m）で、溝は無いとされている。ちなみに同資料から南北道路の幅員は、3間8寸（6.09m）とされ、東西道路よりも1m程広がっている。

米子町の町名の由来は、松江城築城の際に伯耆国米子から移住した職人が居住したことによるとされている。

### 3) 調査の概要

#### 遺構



側溝検出 桐木2本と敷石風の石配置が見受けられる 西側から

#### ・側溝

標高2.22mの歩道面のアスファルト・真砂土を掘下げると、標高1.85mで南北方向に来待石列1段が、標高1.62mで2本の桐木（一部上部に面を作る丸太）に据えられた状況で検出された。これは最近まで使われていた南北に走る側溝の東側壁と考えられる。来待石の西面は、ノミ加工にて面成形されている。西側には石列は無く、杭数本が検出された。これらの遺構の東側には排水管・水道管が、西側には排水管が埋設されていた。桐木の西側部にはヘドロ状黒色土層があり、側溝内堆積土と考えられる。この黒

色土層は胴木の設置標高1.5mで終わっていた。この黒色土層底部には平たい石が点在しており敷石風に見受けられた。黒色土層内からガラス片が見つかった。付近の町民からの聞き取り調査では、「この側溝は現在幅1mを切るが、戦後は1m以上あったようで、現在の幅になったのはいつの頃かは不明である。」とのことであった。胴木の下面には石はなく、造成土と考えられる土層が層順を成していた。なお北側端部の胴木直下には、直径10cmの丸太杭が打ち込まれているのが検出されており、胴木沈下防止用の杭と考えられる。

- ・ゴミ穴もしくは溝 側溝を撤去した後、排水管の間を重機による掘削を行った。標高54cm地点でゴミ穴もしくは溝の底部と思われる黒褐色土層が検出された。この土層の中から江戸初期の肥前陶器が出土している。
- ・石列 ゴミ穴のさらに下層、標高35cmから大海崎石と思われる石が3個南北に並んでいるのが検出された

#### 4) まとめ

南北に作られた側溝に関しては、その底部に伴うヘドロ状黒色土の中から板状磨ガラス片が出土している。また胴木の下には、石積みもなく、使い続けられていた側溝石積とは考え辛い。また重機掘削によりゴミ穴もしくは溝底部と考えられる黒褐色土層が検出され、その中から江戸初期の肥前陶器が出土している。この黒褐色土層のさらに下層から、大海崎石の石列が検出されていることから江戸初期における石列と考えられるがその性格は不明である。

なお、この調査区を境に、来待石+胴木のセットによる側溝は、東側道路沿い（武家屋敷側）に延びており、島石による石積側溝は、西側道路沿い（町屋側）へ延びていることが立会調査（MJR139）で明らかになっている。溝の造成時期は定かではないが、江戸時代から使い続けられていると仮定するならば、町屋と武家屋敷の「違い」を表すものと考えられる。

### ②遺跡名 [南田町52-7番地外 1区]



南田町52-7番地外1区近景 赤ラインが調査区 東側から

#### 1) 調査区設定

調査区は、西側に国道431号線、東側に市道南田南北線に挟まれた区画、城山北公園線北側の歩道内で、現・物部米穀店の前市道寄りである。ここは江戸絵図面から武家屋敷の境地ということになっていることから当地を調査区とした。現在の北側民地では、宅地境となっている。調査区は東西3×南北3mの方形区画とした。

#### 2) 歴史的環境

今回の調査区は、500石以下の武家屋敷が建ち並んでおり、その屋敷の境と想定される場所である。江戸絵図面から、江戸初期には西側屋敷「千手坊」東側屋敷「池村吉」、後期には西側屋敷「坂本仁」、東側屋敷「岡田善」の屋敷主が記載されている。武家屋敷の出入口は、西側屋敷＝西向き、東側屋敷＝東向きとなっており、屋敷地の「裏手の境」と考えられる。江戸中期の資料から、東西道路の幅員は、この「境」から西側では1間5尺（3.45m）、溝幅は4尺（1.2m）が、東側では2間3尺（4.8m）、溝は無いとされている。同資料から西側南北道路（国道431号線）の幅員は3間（5.85m）、東側南北道路（市道南田南北線）の幅員は3間4尺2寸（7.11m）とされ、東西道路よりも1m以上広がっている。



### 3) 調査の概要

調査区南側に近現代の便槽・汚水枡が出たので、それを避け北側部に重機掘削を行った。結果、北壁の土層観察から溝もしくはゴミ穴と考えられる遺構を検出した。

#### 遺構

・溝もしくはゴミ穴 北壁土層面から木片が混入する黒褐色土が確認され、路面より1.9m（標高8cm）掘下げたところで灰色砂層の自然堆積層への掘り込みが確認された。掘り込みは水平方向から一気に垂直方向へ下降している。

### 4) まとめ

屋敷裏手境を意識して掘り下げ、性格不明の掘り込みを検出した。木片が混入する土層を底部に持つということで、溝もしくはゴミ穴と考えられるが、部分的検証なので定かではない。ただ標高8cmの灰色砂層（自然堆積層）を掘り込んでいることを考えると、南北に延びる屋敷境の溝の可能性が高い

### ③遺跡名 [南田町52-7番地外 2区]



南田町52-7番地外2区近景 赤ラインが調査区 西側から

#### 1) 調査区設定

調査区は、西側に国道431号線、東側に市道南田南北線に挟まれた区画、城山北公園線北側で、現：物部米穀店の入り口前・歩道内西寄りである。区画は東西10×南北3mの長方形に設定した。店舗玄関先で人・車の出入りを考慮して、東西を2分割して東側区5×3m、西側区5×3mとして調査を行った。東側区は、調査区北側隣接地をマンホール設置で掘削されていたことから、北側は80cmほど余地を

残し、掘下げていった。最終面精査は、北壁に亀裂が入り崩落の恐れが生じたことから、北面土層断面図とゴミ層の一部重機掘削により終了した。西側区では、ゴミ土層、自然堆積層の精査を行ってから終了した。

#### 2) 歴史的環境

同遺跡1区で前述したように、武家屋敷があったと想定され、出入口部は西向きとなっている。

### 3) 調査の概要



2区東側区 西壁と横木 東側から

#### \*南田町52-7番地外 2区 [東側区]

この付近一帯は、軟弱な地盤であったようで、アスファルト直下には、家屋解体時の盛り土用砂利が厚40cm近くも敷き詰められており、さらに下層には攪乱土が厚40cmで埋められていた。歩道標高は1.8mである。

#### 遺構

・ゴミ穴 標高1mの面から調査が始まり、上層から掘り込まれた3箇所のゴミ穴が検出された。掘

下げを進めると5本の木杭、1本の竹杭が検出された。この杭は東西に並んでいるように見受けられた。標高0.55m検出のゴミ穴には明青灰色シルト質土が埋められており、これらを取り除くとさらに黒色のゴミ土層が現れた。東端部の木杭は深く打ち込まれており、さらに掘下げると直径5～10cm×検出長3.7mの木の枝が東西に横たえてあるのが検出された。この横木の検出高は、東端部の標高0.12m、西端部の標高0.5mを測り、西方向へ徐々に高くなっている。なおこの横木は、丸太1本で一箇所屈曲している。

#### \*南田町52-7番地外 2区〔西側区〕

上層から掘り込まれたゴミ穴を先行して掘り上げ、排水を兼ねたサブトレンチの土層断面を参考に、面精査を行いながら徐々に掘下げていった。東側で検出された東西にのびた横木の続きは、この西側部では検出できなかった。

#### 遺構



2区西側区 ウラジロ敷詰め状況 東側から

- ・礫敷面 標高0.88m面で礫の散在面を検出した。これは土層断面図橙色土の上部に位置するものである。なおこの土層は、固く締まっており、直上に厚約1cmの砂層が広がっていた。
- ・ゴミ土層 東側区で検出されたゴミ土層が西側区でも検出されている。これは両区に広がるゴミ土層で、3×10mの調査区の南西側から北東側に緩やかに傾斜しているのが確認された。陶磁器、下駄・塗椀・櫛・箸等木製品が出土している。

・ウラジロ敷詰め ゴミ土層をさらに掘下げると、標高0.25～0.38m付近からウラジロの敷詰め面が検出された。ウラジロは厚み2～10cmを測り西側区全面に敷詰めてあった。このウラジロ層の直下にはやや褐色の土層がある。

・自然堆積層 標高0.2mで自然堆積層の灰色砂層が検出された。全面に灰色砂層を検出したが、ここでは更なる掘り込みは確認できなかった。

#### 4) まとめ

##### \*南田町52-7番地外調査1区

ここでは、重機掘削により土層観察が可能となった。その結果自然堆積層をさらに掘込んだラインを検出した。この掘込みは、「ゴミ穴」、「屋敷境の溝状遺構」等考えられる。

##### \*南田町52-7番地外調査2区

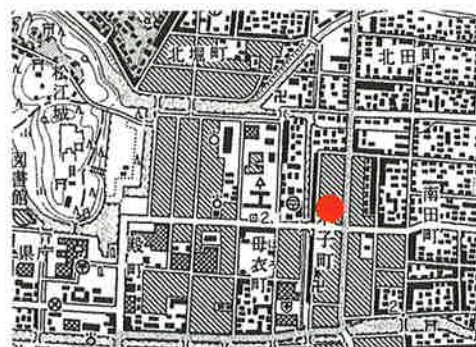
東西2区画に分け調査を行った。両区の間には水道管がありこの部分は掘下げなかった。両区の共通土層としては、遺物・木片が混入するゴミ土層と、自然堆積砂層である。東側区標高88cm検出の砂層が乗る礫敷き固化面は、西側では上層からの掘り込みによって確認できなかった。この土層面を生活面として判断したが時期は不明である。なおゴミ土層は調査区南西コーナーから北東コーナーにかけて緩やかに傾斜をしているようである。この土層に関しては、調査区全体に広がることから10m以上のゴミ穴として道路に沿った帯状のごみ穴等が考えられる

(柚原恒平)



# 松江城下町遺跡（米子町55－5番地外）

- 1. 所在地 松江市米子町55－5番地外、米子町55番地  
米子町54－3他
- 2. 調査原因 松江市城山北公園線都市計画街路事業に伴う
- 3. 調査期間 平成21年4月6日～4月24日  
同 年5月7日～5月25日
- 4. 調査面積 60㎡



調査地位位置図

## 5. 調査の概要

### 1) 調査区設定



米子55-5番地外近景 (赤ラインが調査区)

調査区は、現：理容店から現：食料品店間の仮歩道内で、「米子町55－5番地外」「米子町55」「米子町54－3他」の3遺跡にまたがっている。区画は、城山北公園線に平行して道路縁石から北へ3.6mに、南北幅3m×東西長20mを設定した。付近からウラジロ敷詰め遺構等（平成20年度：立会調査MJR119区）が検出されている。調査区は、東から1、2、3、4区の四区画（一区画3m×5m）を設定し、店舗出入口前・歩道ということから、一区毎に掘下げ・埋め戻しを行うこととした。また現場調査は、5月の大型連休を挟むことになるので、4月中に掘り上げた1、2区の10m間の仮舗装を行い、歩行者の安全に努めた。残りの3、4区は5月連休明けからの現場調査とした。掘削深度は南北幅が狭いことから標高0.9m前後が限度となった。

### 2) 歴史的環境

米子町の町名の由来は、松江城築城の際に伯耆国米子から移住した職人が居住したことによるとされている。今回の調査区は、江戸中期の絵図面から、町屋が建ち並ぶ場所で、東西道路の幅員は、2間4尺(5.1m)で、溝は無いとされている。また同資料から、この付近の町屋群の配置は、米子川東岸に沿って南北方向へ延びる町並みと、米子橋から道路に沿って東へ延びる町並みとなっている。



1区: 標高0.9m 横木検出 北側から

調査区は、現：理容店から現：食料品店間の仮歩道内で、「米子町55－5番地外」「米子町55」「米子町54－3他」の3遺跡にまたがっている。区画は、城山北公園線に平行して道路縁石から北へ3.6mに、南北幅3m×東西長20mを設定した。付近からウラジロ敷詰め遺構等（平成20年度：立会調査MJR119区）が検出されている。調査区は、東から1、2、3、4区の四区画（一区画3m×5m）を設定し、店舗出入口前・歩道ということから、一区毎に掘下げ・埋め戻しを行うこととした。また現場調査は、5月の大型連休を挟むことになるので、4月中に掘り上げた1、2区の10m間の仮舗装を行い、歩行者の安全に努めた。残りの3、4区は5月連休明けからの現場調査とした。掘削深度は南北幅が狭いことから標高0.9m前後が限度となった。

調査区は、現：理容店から現：食料品店間の仮歩道内で、「米子町55－5番地外」「米子町55」「米子町54－3他」の3遺跡にまたがっている。区画は、城山北公園線に平行して道路縁石から北へ3.6mに、南北幅3m×東西長20mを設定した。付近からウラジロ敷詰め遺構等（平成20年度：立会調査MJR119区）が検出されている。調査区は、東から1、2、3、4区の四区画（一区画3m×5m）を設定し、店舗出入口前・歩道ということから、一区毎に掘下げ・埋め戻しを行うこととした。また現場調査は、5月の大型連休を挟むことになるので、4月中に掘り上げた1、2区の10m間の仮舗装を行い、歩行者の安全に努めた。残りの3、4区は5月連休明けからの現場調査とした。掘削深度は南北幅が狭いことから標高0.9m前後が限度となった。

### 3) 調査の概要

四分割して調査を行ったことから東側の1区から順次説明する。歩道面標高は、西方向（米子川）へ行くにつれやや高くなるが平均値として標高2.4mである。区毎に埋め戻しを行うことから、区境には土壁を残すこととした。

1区（東側起点から1.5m～5mの区間） 東端部に汚水管及び真砂土帯が検出されたので調査区を

縮小した。標高1.7m付近で礎石1を、1.5m～1.6mにかけて根石を3箇所検出している。礎石1と根石1はセットである。標高1.1～1.2m間、東端部から南北に続く石列を検出している。標高0.9m面より、木片を検出している。木の長軸には、溝が掘られており建築部材「鴨居」と考えられる。この木の北側脇に15cm間隔で数本の竹が刺してある痕跡を検出している。最深部の標高0.65mでは、緑灰色の盛り土が検出されている。

**2区（東側起点から5m～10mの区間）** 標高1.6m面で不明ピットを検出している。標高0.8m～1.1m間、西端部より石列を検出している。石列は面を造る様相を示している。標高0.6m～0.8m間、西端部



2区：標高0.8～1.1m 石列検出 南側から

より石列を検出している。上下ばらつきはあるもののこれらは「石積」と考えられる。西端部で重機による断ち割りを行った。掘り込み遺構に伴う黒色土が検出され、西側（3区）へ続く様相が見られた。掘り込み底部は標高0.22m、ここでの灰色シルト質土（自然堆積層）はマイナス0.28mである。

**3区（東側起点から10m～15mの区間）** この区から特に安全勾配を意識して掘り下げた。標高1.72mで小穴検出。小穴径は48cmである。石4点（内大海崎石3個）が検出された小穴底部標高1.59mで板材2枚、竹製タガの一部検出された。桶等板材を利用しての礎板及び根石と考えるとピットの可能性がある。ただ、掘り込み径より底板が大きいのが、これは軟質土によるひずみと考えられる。標高1.45m、東端部より石列を検出している。東端部で西側に落ち込む掘り込み遺構を検出した。2区西端部検出の掘り込みと同一遺構と考えられる。なおこの掘り込みを境に「造成土層の色調の違い」が見受けられる。



3区：標高1.45m 石列を検出 北壁に掘り込み

**4区（東側起点から15m～20mの区間）** 標高1.56m付近で西側への掘り込みと掘り込みに伴うと考えられる石積が標高1.5～0.7m間に検出された。石積は2～3段積みと考えられる。上部は大海崎石を使い、最深部は島石を使っており、西側に面を造っている。標高1.29m石裏側には一辺15cmの角材が横たえてあった。標高1.14mで、板材で蓋をしてある木桶を検出している。木桶の中から不明骨片が検出されている。飼育していた動物（幼獣もしくは鳥？）を埋葬したものと考えられる。



4区：標高1.14m 桶検出



#### 4) まとめ

遺構検出面を大別すると、標高1.5m付近、1.1m付近、標高0.8m付近に分けられるものと考えられる。これらの標高面が、単純に生活面に一致するかは今の段階で判断できないものの、今後、出土遺物・土層等データを検証することで何らかの成果が得られるものと考えられる。

起点より8mから12mにかけての溝?についても、これを境に、造成土の土色の相違が見られることから町屋の建物境等が考えられる。境の溝とするならば、現在の側溝より8~9m程西寄りに位置することになる。

起点より17.5m以西にかけての溝?は西側に広がりを見せるもののその性格は不明である。

昭和20年頃、この近辺は米子川埋め立て、道路拡幅等大きな変化を見せていることから、戦後の状況の聞き取り調査が必要と考えられる。今後、城下町本調査、立会調査、出土遺物、聞き取り調査等の資料を検証することで、町屋の様相が多少なりとも解明できるのではと考えられる。

\*各区北壁土層写真 (赤ラインは標高1.5mを示す)



2区



1区



4区



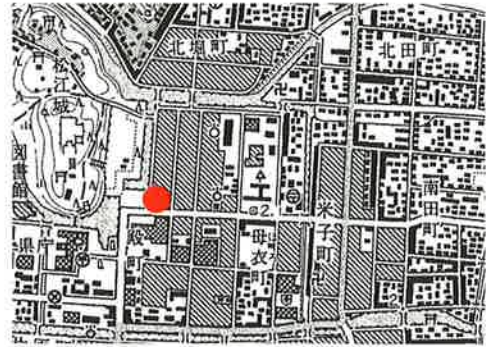
3区

(柚原恒平)

参考文献 「大手前通りの歴史を調べる会調査結果報告書」大手前通りの歴史を調べる会 2004年3月

# 松江城下町遺跡（殿町191番地13外）

1. 所在地 松江市殿町191番地13外
  2. 調査原因 松江市城山北公園線都市計画街路事業に伴う
  3. 調査期間 平成21年7月8日～11月19日
  4. 調査面積 332.5㎡
  5. 調査の概要
- 1) 調査区設定

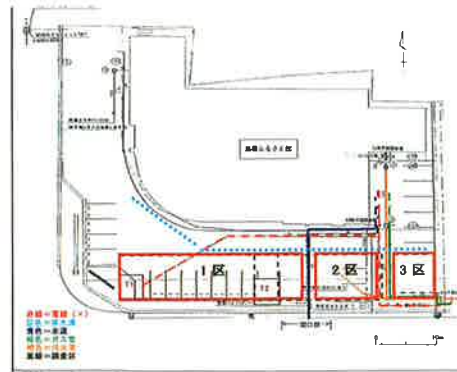


調査地位置図

調査は、島根ふるさと館の南側にあたり、駐車場の確保及び埋設管の回避等の理由から、3区に分割して調査を行った。西側から調査1区：南北7m×東西30.5m、調査2区：南北7m×東西11m、調査3区：南北7m×東西6mで、いずれも方形を呈する。調査は1区→3区→2区の順に行った。いずれの調査区も路面アスファルトの下層は、土壌改良と思われる厚み20cm前後のコンクリートで覆われている箇所があり、重機による破碎・はぎ取り作業から始まった。以下は「調査1、2、3区」をまとめた概要報告書である。



島根ふるさと館近景 南西側から



調査区位置図

## 2) 歴史的環境

調査地のある殿町は、松江城の東側に位置しており、その名のとおり、「内山下」の中核を成している。城山北公園線は、この殿町を東西方向に縦断して松江城大手前へと続いており、当時から重要な基幹道路であったと考えられる。

今回の調査区は、この城山北公園線の北側に隣接する場所であり、江戸時代には1000石以上の上級武家の屋敷地であった。調査地の「主」は、現存する絵図面から江戸時代初期・堀尾期では、神保清十郎（禄高2000石）の屋敷地で、松平期になると「大野舎人」、その後「脇坂源五左衛門」と判明しているが、この他にも複数の主替えが行われていたようである。江戸中期の絵図から、道路幅員は南側5間2尺5寸（10.5m）、西側4間4尺（9m）で、溝幅は南・西共に2尺（0.6m）となっている。

この後、明治6年（1873年）の松江市2分間図では、当地は細分割されていない。東側隣接地や付近一帯は、すでに細分割され民地化していることを考えると、特別な事情があつてのことかもしれない。

蛇足ながら戦中戦後における当地の移り変わりを記しておく。昭和20年、疎開以前の地図からは「海軍人事部（日本聖公館）」が存在していた事が知られており、その後、昭和37年には松江消防署が開署している。調査1区の試掘溝T2からは同年の記年名の入ったコンクリートのテストピースが出土している。また、平成4年には、島根ふるさと館が開館しており、同じく調査1区のコンクリート残骸内から平成3年の新聞紙が発見されている。



### 3) 調査の概要

#### 調査1区（東西30.5m×南北7m）西区と東区の2分して調査



調査1区西区：南壁に軟質岩 手前床面は黒褐色砂層が検出された

土層 松江の旧地形（江戸時代の盛り土以前）にある基盤層「松江層」は、軟質の泥岩・砂岩で構成されている。これらの軟質岩が城下町を造成する際の「盛り土」として敷き詰められた状態で検出された。また松江裁判所前や島根行政評価事務所跡地、松江歴史館予定地の発掘調査で検出されている城下町造成当時の土層と考えられる黒褐色粘質土（通称チョコレート層）に替わって、ここでは「黒褐色砂層」が検出されている。松江城下町の基本層序は、灰色砂層（自然堆積層）の上に黒褐色粘質土が乗る。概ね城下町造成は、この黒褐色粘質土の上に盛り土を施していることから、この黒褐色土層を基盤層と考

えている。今回の調査区では、灰色砂層（自然堆積層）の上に小礫層が薄く乗り、次に黒褐色砂層が乗っており、この上に盛り土を施していた。この黒褐色砂層は標高約0.8mにほぼ水平に堆積しており、この黒褐色砂層を基盤層とした。

#### 遺構

・ゴミ穴1（南北4m以上×東西6m以上×深さ0.84m）多数の小木片、多量のおがくずのまとまりを検出している。



調査1区西区：完掘状況 東側から



調査1区東区：完掘状況 西側から



調査1区東区：ゴミ穴1の断面（手前の方形枠は近代地下構造物）



調査1区東区：ゴミ穴1おがくず出土状況



・柱穴群 南北に並ぶ柱穴列が検出された。

遺物 出土数は非常に少ないものの、主に江戸初期の肥前系陶器片が出土している。

#### 調査2区 (東西11m×南北7m)

##### 遺構

・ゴミ穴4 (幅1.6m×長さ2.8m×深さ0.15m) 19世紀の陶磁器片が出土している。



調査2区: 南壁での黒褐色砂層検出状況



調査2区: 完掘状況 南側から

#### 調査3区 (東西6m×南北7m)



調査3区: 完掘状況 東側から

##### 遺構

- ・ゴミ穴2 (東西幅1.6m×南北長3.9m以上×深0.63m) 南縁を起点として北側に延びる。
- ・ゴミ穴3 (東西長3.5m以上×南北幅1m以上×深0.47m) 東縁を起点として西側に延びる。
- ・柱穴群 南北に並ぶ柱穴を検出している。

遺物 江戸初期の肥前系陶器片が出土している。

#### 4) まとめ

いずれの調査区も、上層にあるべき遺構面が近現代攪乱により削り取られていた。遺構面は、調査1区・3区では2面検出したものの、調査2区においては、最も深く近代攪乱を受けており遺構面1面のみの確認で終わった。現段階では1区と3区検出の第1遺構面は江戸中期、第2遺構面は江戸初期、2区検出の遺構面は江戸初期と考えている。

土層は、松江城のお堀端には、松江層＝軟質岩が露頭している。今回の調査地からも類似した松江層の軟質砂岩が盛り土として使われており、江戸時代の造成初期段階に堀掘削を行い、その掘削土を近場の盛り土として利用したと考えられる。

遺構は、1区の大鋸屑・鉋屑が検出されたゴミ穴は、江戸初期のゴミ穴と思われ、その量から、この付近に大工関係の工房の存在が考えられる。大手前通りに直交した柱穴列については、一部柱間が約1.4mを示しており、これらに対となる柱穴列は検出できなかった。柵あるいは塀のような構造物と考えられる。

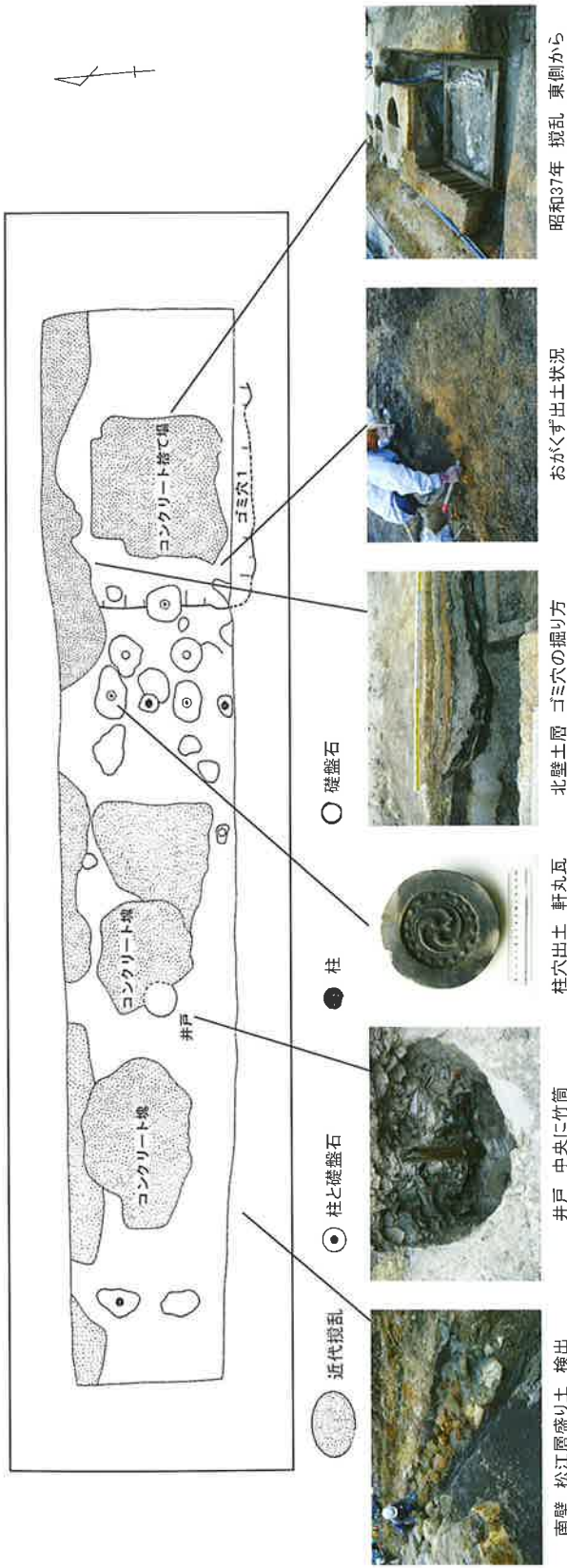
(柚原恒平)

#### 参考文献

柱穴内底部に据えてある石を「礎盤石(地下式礎石)」とした「古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編」2003年奈良文化財研究所より参照  
「大手前通りの歴史を調べる会」調査結果報告書 大手前通りの歴史を調べる会 2004年3月



調査1区 (江戸時代初期の遺構平面図)



昭和37年 攪乱 東側から

おがくず出土状況

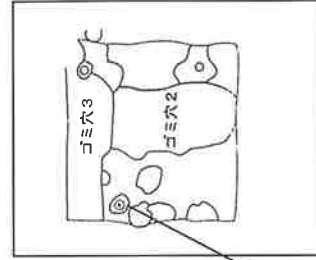
北壁土層 ゴミ穴の掘り方

柱穴出土 軒丸瓦

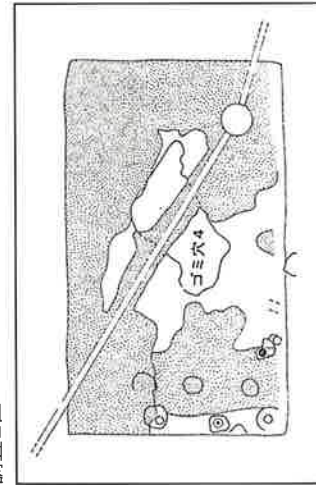
井戸 中央に竹筒

南壁 松江盛り土 検出

調査3区



調査2区



0 1 2 3m



調査3区 南側から



礎盤石の上に建つ柱



調査2区 南側から

殿町191番地13外 各区遺構平面図